

6月5日

殉教者主教ボニフェース

Bonifatius

(672/675~754)

～ドイツ宣教に献身する～



「聖ボニファーティウス」

Little Pictorial

Lives of the Saints より

人名辞典などではボニファーティウスと表記されることが多いが、彼はドイツに対して宣教し、またフランス教会の再組織をした人物として記憶されている。

彼はイギリス人のベネディクト会士であるが、若いときには修道院学校の教師をしたり、またイギリスで最初のラテン語文法書や詩を書いたりした。

しかし、外国宣教の必要性を感じ、716年、現在のオランダにあるフリースラントに行くが、挫折してイギリスに帰郷することとなる。その時、教皇からの任命の必要性を感じた彼は718年ローマに行き、教皇グレゴリウス2世から宣教の任務を与えられる。その頃、ボニフェースという名をもらったと考えられるが、3年間、フリースラントで先輩のもとで修業したのち、ドイツ各地へ赴き、宣教をし、修道院を建設していく。特に異邦人たちには優しく接し、その人柄も慕われていった。

その頃、地域の人が崇めていた雷神の樫の木を切り倒して異教の神の無力さを実証するといったエピソードも残されている。

彼の働きによりフランク王国(現フランス)東部の宣教は急激に進んでいき、教皇グレゴリウス3世は732年、ボニフェースを宣教大司教に任命する。

さて、フランス・ドイツ・オランダを後にカトリック国として統一したチャールズ大帝の父ピピンは、当時乱れていたフランク王国内の教会改革を依頼する。747年には二度の王国内の公会議を経て、教会にローマに対する忠誠を誓わせる。

その後彼は宣教を続けるが、ドックムの近くで50名ほどの修道者とともに、キリスト教に恨みを持つ暴徒たちに襲われその命を落とす。その時、刀をもって命を守ろうとした仲間に対して、ボニフェースは次のように言った。

「刀を納めなさい。聖書は、悪に善をもって応えるように教えています。」

彼の遺体は、自らが建設したフルダ修道院に運ばれ、おさめられた。(Y)

<特禱>

全能の神よ、あなたはみ力と恵みによって、聖なる殉教者主教ボニフェースに苦難に勝ち、死に至るまで忠実である生涯を与えられました。どうか恵みをもってわたしたちを強め、どのような迫害にも耐え、主イエス・キリストのみ名を忠実に証することができますように、主は父と聖霊とともに一体であって世々に生き支配しておられます。

アーメン